

随 想

オランダの鐘

教科教育部 吉田 伊勢吉

それは、もうだいぶ以前のことになるが、地理の調査のために、矢吹ヶ原をかけずりまわったことがあった。そして、昨冬、はからずも再びこの地を訪れる機会を得た。

古くは「なでしこ原」と呼ばれた中島村の滑津原は県内一の山林用苗木の産地。いまは公害に強い緑化樹の苗木生産にも力を入れ、緑化木王国づくりをめざしていた。弥栄開拓の「協力拓楽土」の記念碑や俵井の田子倉記念碑をカメラにおさめ、六軒原の岩瀬牧場に着いたのは夕ぐれどきであった。

目あての鐘は、牧場の飼料小屋の軒下に吊され、ややびびわれたものの、今なお健在であった。

ただ一面に立ちこめた

牧場の朝の霧の海

ポプラ並木のうっすりと

黒い底から勇ましく

鐘が鳴る鳴るカンカンと、

これは、戦前育ちの人なら、だれでも一度は口ずさんだ思い出をもつ、ご存知の文部省小学唱歌「牧場の朝」の歌詞である。ひろびろとした大地に、静かに霧がたちのぼる牧場の朝、そんな情景が目の前に浮かんでくるようである。この歌詞のモデルとなつたのが、ここの牧場とこの鐘であるという。

この六軒原一帯は、明治の初めまで、広い原野のまま、人家はほとんどなかった。火山灰土が広く分布し、水の便も悪く、開発のおくれた土地であった。明治9年の初夏、東北巡幸の旅に出られた明治天皇は、矢吹ヶ原一帯の原野を通過する際、側近に「開拓の方法はないものか」と声をかけられたといわれる。こうして明治13年、鏡石から矢吹にかけての広い原野が御料地となり、宮内省直営の獵場が開設され、開墾計画がたてられることになる。明治14年の記録には、六軒原の宮内省開墾所には係官3人、

農夫15人が開墾事業に従事していたとある。

六軒原の開拓には、欧州式の大農経営法が導入され、近代牧場が生まれた。広大な区画の農場、馬に引かせた大型農機具、欧州の建築をまねた家など、そこには当時の日本としては異色の農村風景が展開した。こうして創設された宮内省開墾所は、明治23年いらい民間への委譲が行われ、ここに岩瀬牧場が発足する。

ところで、直径60cmほどのこの鐘は、明治43年にこの牧場でオランダから乳牛13頭を輸入した際、その記念に贈られたもので、牧場に残るオランダ国発行の牛籍簿がこれを裏づけている。こうしてみるとこの鐘は、まさに明治期におけるこの地への酪農経営導入のシンボルであるといえる。

「牧場の朝」の作詞者の考証に興味をもった地元医師最上寛氏の非常な努力の結果、作詞者は杉村楚人冠（朝日新聞記者、天声人語欄の創筆者、昭和20年没）、作曲家は船橋栄吉（東京上野音楽学校教授、昭和7年没）であることが解明されて話題となった。これを考証する資料としては、「楚人冠日記」や大正7年発行の中学国文の教科書の記事などがある。楚人冠の日記によれば、彼は明治43年、ある画家とともにこの牧場を訪れ、しばらくここに滞在し、「牧場の朝」の歌詞を得たとしている。オランダの鐘と牧歌的な牧場の朝の情景をモデルに、かくしてこの珠玉の風物詩がつくられたのであった。

さて、明治、大正、昭和にわたって、朝な夕な牧場で働く人々や付近の人々に時を告げてきたこの鐘も、年を経て破損もはなはだしくなり、牧場の記念として事務所に永久に保存されることになっているという。新しく組まれた櫓やぐらにこの鐘の二代目つるが吊される日も近い。異国情緒を想わせる澄んだ牧歌的な音色が、遠くまで風に乗って響き渡る日が待たれる。